

高田が生んだ「国境」の軍使

漢中市 八木智恵子（南本町出身）

会報一九九号の中に「追憶 軍都高田」安藤三郎様の記事の中に「ノモンハン事変での苦闘」が目にとまりました。

ノモンハン事変のこと、ホロンバイル高原のこと、九月十六日の停戦のこと等、祖母から聞いていました。

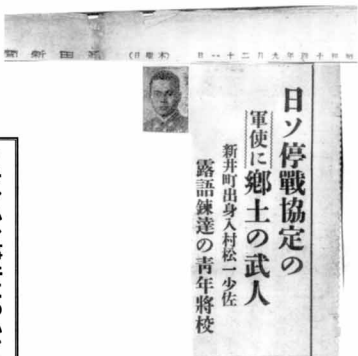
その停戦協定に臨んだ軍使が入村少佐（入婿）こと旧姓伊藤松一少佐であったとのことでした。

私の叔父です。

当時のいろいろなお話も、もう昔のこととて、既に高田の生家もなくなりましたが、当時の新聞のみ大切に保管してあります。



1939年9月21日（木）の「新潟読売」の記事 右から榮（父）、祖母（テイ）、入村（叔父）



同日の「高田新聞」の記事

ノモンハン事件について

〔編集部・注〕

ノモンハン事件について手元にある資料や、実際に参戦した野口春雄さんからお聞きした話などをまとめてみた。

ノモンハン事件

『ノモンハン事件の真実』（星亮一著P H P文庫）より一部を引用する。

中国の東北地方、旧満州の西北、興安嶺を超えると、莽蕪たるホロンバイルの大草原が外モンゴルのモンゴル人民共和国に続いている。

そこを南北に流れるハルハ河の手前が、ノ

モンハンであった。満州建国以来、同地方を事実上支配していた関東軍と、外モンゴルを勢力下に治めていたソ連軍は、この一帯で対立関係にあった。国境線が不明確で、それが紛争の原因となった。

昭和十四年（一九三九年）五月十一日、満州国の国境警備隊がソ連軍配下の外モンゴル軍から発砲を受けての小競り合いが続ぎ、満州国軍が救援に出向く出来事があった。

五月下旬になつくと、ソ連軍と外モンゴル軍が大拏して越境を始め、満州国の領土を侵害したと見たハイラルの第二十三師団は、一個連隊を急派したが苦戦に陥り、ついには七月下旬、第二十三師団とチチハル駐屯の第七師団を投入する大規模な戦争が勃発した。

これが「モンハン」事件である。

結果、ソ連軍の優勢を思ひ知らざれば、日本軍は大きなダメージを受けた。（中略）

日本軍はこの草原で特攻作戦を行つていった。

ソ連軍は「モンハン」の戦場に戦車を大量投入した。装甲の薄い日本軍の戦車は、ソ連軍の戦車砲で吹き飛んだ。

日本軍の有力な対戦車作戦は、火炎瓶だった。サイダー瓶にガソリンを入れ、瓶の口にガーゼを詰めて肉薄攻撃機がマツチで火をつけ、戦車に向かって飛び出し、ぶっつける戦法だった。

炎天で戦車の鉄板が火の様に熱くなつていく。すぐ、ポツと火花ルマになる。

ついには、地雷を抱いて戦車に飛び込む兵士も出てきた。

これは取るべき戦法ではなかったはずだ。ソ連軍をなまじ撃破したことで、突撃と夜襲が日本軍のお家芸となり、人間性無視の軍隊が現れ、太平洋戦争で次々に惨敗して行つた。

歩兵三十連隊と「モンハン」

一万五千人の兵士の七十パーセントが死傷するという惨憺たるもので、資料によつては五万人を超える日本軍が死んだとも書かれている。

この戦争には高田の歩兵三十連隊や新発田の歩兵十六連隊も参加しており、昨年亡くなられた野口春雄さんも「モンハン」へ行かれており、「モンハン」は全く無駄な戦争で、やるべきでは無かったんだ。」と言つておられた。

石油等の資源が出る訳でもなく、何の価値もなかった草原でこれだけの戦争を行う必要があったのか大いに疑問である。ソ連側も首をかしげる戦争だった。

三十連隊で参戦した石坂准尉の話がインターネットの中にある。

「明夫、この歩兵第十六連隊全滅して、親父はその目を見たの」

石坂「ああ、しかと見たよ。ソ連軍の戦車が数百台単位で十六連隊に襲いかかつてね、ひどい光景だった。目の前が火の海で、こっ

ちの三十連隊は助けようにも助けられなかった。もともね、十六連隊が突出したのは命令違反なんだ。当時の連隊長・宮崎繁三郎大佐の判断なのか分からないけど、はっきり言つて自業自得だ。関東軍の独断専行はある種の伝統とはいへ、陸軍中樞の命令を無視したんだからね。

不忠誠と宮崎中将の評伝に「モンハン唯一の勝利者」なんて言葉が躍つているけど、現場を目撃している人間から言わせれば、どこが勝利者なんだと首をひねつてしまふ。戦車の下敷きになつて悲鳴を上げてゐる日本兵を何人も見ている俺は、

「日本軍は「モンハン」で大負けしたんだ。誰も彼もか」

と、絶叫したいくらいだよ。同郷の新発田歩兵第十六連隊は「モンハン」で壊滅したんだ、間違いな」

そう言えば野口さんも「ある日、ソ連軍の戦車の大群が我々の隊に向かって突進して来たんだよ。こちらには満足な火器がなく、これで最後かと覚悟をきめたね。ところが、襲いかかる寸前に何故か向きを変えて戻つて行つて命拾ひしたね。ついでいたんだよ」と話されていたことがある。その時、停戦協定が成立していたようだった。

独ソ不可侵条約が締結されたのを機に昭和十四年九月十五日ソ連との停戦条約

が成立した。

ロシア語に精通していた入村松一砲兵少佐はこの時、日満軍の軍使として活躍されたことが新潟の新聞で報道された。この入村少佐が、今回投稿された八木智恵子さんの叔父さんに当たる。



日ソ停戦協定成立後の記念写真



1939年9月19日停戦確認
第六軍参謀長の藤本少将（右端）